様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４４９

研究課題名（和文）近代ドイツにおける〈身体〉の啓蒙　―汎愛主義体育の思想的研究―

研究課題名（英文）The Enlightenment of the Body in Modern Germany: An Ideological Study of Philanthropic Physical Education

研究代表者
田口　武史（Taguchi, Takefumi）

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：７０５４８８３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：汎愛主義の教育家J.C.F.グーツムーツは、有能な市民を育成する手段として「体育（Gymnastik）」の開発と普及に努めた。内発的動機に促された運動のための運動によって、個々人それぞれの成長と完成を図るのが当初の目標であった。それは身体の啓蒙と呼ぶべき試みだったのだが、ナポレオンのドイツ占領以降、グーツムーツは右傾化し、F.L.ヤーンとともに国家のための体育を推進するようになった。しかしこれは、政治的変節ではない。来るべき市民社会と国民国家を担いうる有用な身体の育成という汎愛主義体育の目標設定に、すでにパトリオティズムやナショナリズムへと展開してゆく契機が含まれていたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グーツムーツの汎愛主義体育は、主に体育学・教育学の分野で歴史的観点から研究されてきたが、本研究は彼の著作の言説分析をおこなうことにより、その思想的特性を明らかにした。
すなわちグーツムーツは、個人の身体活動に公共的価値を見いだし、身体的陶冶が自分のためにも社会のためにもなると考えた。彼の主張に従えば、体育によって我々は個人化と社会化という教育上の二律背反を克服しうる。しかし別の角度から見るとそれは、近代市民の価値観を個人の身体に浸透させる仕掛けにほかならない。スポーツとナショナリズムや権力との関係が取り沙汰されるとき、近代体育の形成原理となった生政治的志向を意識することは重要であろう。

研究成果の概要（英文）：J.C.F. GutsMuths, a philanthropic educator, sought to develop and popularize Gymnastik as a means of cultivating competent citizens. The initial goal was the growth and perfection of each individual through exercise for exercise's sake, prompted by intrinsic motivation. It was an attempt at what might be called physical enlightenment, but after Napoleon's occupation of Germany, GutsMuths took a rightward turn and, together with F.L. Jahn, began to promote physical education for the state. This, however, was not a political inflection. The goal of philanthropic physical education, which was to nurture useful bodies that could play a role in the coming civil society and nation-state, already contained the opportunity to develop into patriotism and nationalism.

研究分野：ドイツ近代思想

キーワード：身体　体育　グーツムーツ　ヤーン　汎愛主義　ナショナリズム　愛国主義　生政治

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

〈汎愛派〉の教育家たちは、18 世紀後半から 19 世紀初頭のドイツにおいて、市民的価値観に基づく教育改善運動を推進した。心身共に活動的で有能な市民を育成するという目標を実現する手段として、彼らが注力したのが身体の教育である。なかでも J.C.F.グーツムーツ（1759-1839）は、身体運動を理論化・体系化してギュムナスティク（Gymnastik、体育）という一個の教科にまとめ上げ、さらに著作を通してこれを広くヨーロッパ各国へと普及させた。キリスト教文化圏で何百年も続いた身体軽視の風潮を覆し、現代スポーツへと続く流れを生み出した意義はきわめて大きい。

ところがグーツムーツの業績は、体育学や教育史の専門家を除いて、現在ではほとんど知られていない。たしかに体育の歴史記述において、彼は「体操の祖父」として確固たる地位を占めている。しかしこの代名詞が意味するのは、トゥルネン、いわゆるドイツ体操を創始した「体操の父」F.L.ヤーンの先行者という評価である。グーツムーツの体育は、ヤーン以降の体育史から遡及的に理解される傾向が強いのである。愛国主義と自由主義の闘士たるヤーンが、様々な関心からのアプローチを誘う問題性を帯びているのに比して、学校現場を離れることがなかったグーツムーツの生涯は穏健で、目立たない。グーツムーツが、ごく限定的な学問分野でのみ研究対象とされてきたのはそれゆえであろう。

教育史・体育史における先行研究としては、19 世紀後半に S.ヴァスマンスドルフ、20 世紀初頭に A.ネッチュ、1960 年代以降は H.ベルネットや W.シュレーダーによる歴史的・伝記的研究のモノグラフィーがあり、1998 年には研究文献目録が出版されている。さらにグーツムーツ生誕 200 年（1959 年）と 250 年（2009 年）を記念する論集も発行された。E.ケーニヒは『身体－知－力』（1989 年）で、汎愛主義体育にフーコーの謂う「規律・訓練」の志向を見出し、厳しく批判する。日本においては、成田十次郎および山本徳郎による一連の研究が特筆される。前者はドイツ近代体育史全体の中でグーツムーツを詳述し、後者は特にグーツムーツとヤーンの相違について鋭い指摘をしている。最近では有賀郁敏と小原淳が、トゥルネンの研究においてグーツムーツに目配りしているが、考察の中心はヤーン以降の体育をめぐる社会史にあるため、汎愛主義体育はトゥルネンの先駆形態としての扱いに留まる。

グーツムーツの体育は本来、生得能力を自然に且つ十全に発現させんとするルソーの教育思想を引き受けるものである。E.ケーニヒは、この点にカントによる啓蒙のモットー「自分自身の理性を用いる勇気を持て」との同質性を見出す。すなわち体育は、啓蒙思想に呼応した科学的で進歩的な自己解放の試みとして開始されたのである。とはいえ 19 世紀に入ると間もなく体育は――ヤーンのみならず、グーツムーツ自身の積極的働きかけで――愛国心に促された自己研鑽と団結を目的とする活動へと変化した。身体に対する啓蒙、身体を通した啓蒙という革新的な発想が、いかにして愛国主義という、一見正反対の方向性を持つに至ったか、この問題が依然慎重に検討すべき課題として残されている。

２．研究の目的

本研究は、身体という次元から 18‐19 世紀転換期のドイツの文化と思想に新たな光を投げかけることを目的としている。ドイツの知識人たちが示した〈身体〉への強い関心、とりわけ汎愛派の J.C.F.グーツムーツの開発した体育に注目することで、身体が啓蒙と教育の対象として浮上した経緯を明らかにする。また、そこに看取される価値観の相克（自由／統御、進歩／復古、教養／有用等）を、20 世紀の「保守革命」に至るダイナミズムの起点として位置付けることを目指す。18 世紀後半以降の思想的布置、およびドイツの市民社会・国民国家確立の動きが身体観に及ぼした影響を測るとともに、「体育」「遊戯」「作業」という身体活動をとおした新しい教育手法が、個人の身体に社会的意味を付与してゆく様を具体的に跡付ける。

３．研究の方法

汎愛派の革新的教育が成立しえたのは、近代化を図る啓蒙専制君主たちによって承認、支援されたからである。その教育方針は近代国家の利害に適っていた。より踏み込んで言うならば、市民が近代国家の主体となるための戦略的人材育成という側面が、汎愛主義教育にはあった。したがって体育は、市民階級が自らの〈身体〉を国家と社会に適合させる訓練として構想されたのだと推測されよう。ルソーもメンデルスゾーンも否定した〈人間の教育〉と〈市民の教育〉の両立を、ギュムナスティクによって果たそうとしたのである。この仮説に基づき、汎愛主義体育を対象に以下の問題を検討する。

・学校における体育が、啓蒙の後進国であったドイツにいち早く出現したのはなぜか。
・〈人間の教育〉と〈市民の教育〉、あるいは〈人文学〉と〈実学〉の対立を、体育はいかに調停したか。それは〈知〉のあり方にどのような変化をもたらしたか。

・体育は〈身体〉をどう意味づけたのか。それは 19 世紀のナショナリズムやロマン主義的教育観にどのような影響を及ぼしたか。
・体育は、やはり 18 世紀末以降、市民階級の教育手段として注目されるようになった「遊戯」や「手仕事（労働）」と、どのように関連しているか。
・「ギュムナスティク」と「トゥルネン」の異同はどこに、どの程度認められるか。

４．研究成果

［2021 年度］

①グーツムーツの考案したギュムナスティクについて、古代以降のヨーロッパ体育史を概観しつつ、その歴史的・思想的位置づけを探った。グーツムーツは、それまで単なる娯楽と認識されてきた身体運動・遊戯に、健全な精神と公益に資する身体を育む教育的効果を見出した。無論、これは既に古代ギリシアに確立していた思想だが、キリスト教化以降のヨーロッパでは半ば忘却されていた。かかる状況を打破したのはロックとルソー、そして彼らの教育理念を実地に移したドイツ汎愛派である。この一派に属するグーツムーツは、個人の生得能力を引き出すことを目的に、運動・遊戯を汎愛学校の教育プログラムに組み込んで体系的に実施した。同時に、汎愛学校のステークホルダーたる市民階層に対し、身体活動の社会的価値を訴えた。その際、運動が卓越した人間性につながる証として、古代オリンピックを――クーベルタン男爵より 1 世紀も早く――引き合いに出した点がとりわけ注目される。運動する身体が、近代において精神性と神聖さを再獲得する、ひとつの重要な契機となったと推測されるからである。

②論文「祖国ドイツの友として、両親、教育者、教師は子供の教育において今何をすべきか」（1815）を対象に、19 世紀に入ってグーツムーツの体育が変質する様を跡付けた。グーツムーツは、元来啓蒙主義的コスモポリタニズムを信条としていた。しかし、ナポレオンによるドイツ占領を経験した後はナショナリズムへと傾き、「祖国のための体育」を提唱するようになった。個人の自己実現と公共心育成のために構想された体育は、いまや祖国の自由と独立を守るための教練となった。体育教育黎明期に生じたこの路線変更は、しかし、不幸にもタイミングが重なった政治的事件の結果ではない。社会的に有用な身体を育てんとする功利主義的志向に、すでにナショナリズムが胚胎していたと考えられる。

［2022 年度］

18－19 世紀転換期の政治動向が、グーツムーツの体育教育思想に及ぼした影響を明らかにするため、彼の主著『青少年の体育』の初版（1793 年）と第 2 版（1804 年）をテクストに即して比較しつつ、それぞれの特徴と改訂方針を検討した。

〇政治的側面

【初版】思想的党派性の薄い、合理的で実用的なマニュアル書。身体訓練を学校で実施するための方策を示す、いわば学習指導要領。

【第 2 版】現社会体制の中で、中間市民層が（体育をとおして）国家や社会に対して果たすべき責務を強調。身分制社会とそれに起因する諸問題に対しては同情的だが、積極的な策は示していない。

〇科学的側面

【初版】あらゆる運動が身体の特定部位、あるいは全身の機能・柔軟性向上という明確な目的をもって指南されている。精神力強化という効用も、ある種の生理現象として説明。

【第 2 版】科学的・分析的な記述がさらに徹底されている。医学用語や数値的データの追加により説得力を高めようとしている。

〇陶冶的側面

【初版】どんな人間も生来活動的であるという確信。個々人の進歩を精密な測定に基づいて評価することで、たゆまぬ能力開発を促す。

【第 2 版】ゲルマン人への言及がすべて削除された（ゲルマン人と現代ドイツ人に連続性を持たせると、現代ドイツ人の身体が遺伝的に規定されてしまうからであろう）。体育による自己陶冶は、個人の倫理的責務であることが示されている。

後に愛国主義運動の一翼を担うグーツムーツであるが、『青少年の体育』の改訂においてはまだ、ドイツという国家ないし自国民・自民族に対する特別な意識は認められなかった。むしろ科学的合理性と普遍妥当性の重視と個人志向が顕著であり、また一貫した執筆方針となっている。自律的個人（特に青少年）の実現および自律的個人による近代社会建設というビジョンが、ドイツにおける近代体育教育の出発点にあることが確認できた。

［2023 年度］

昨年度までの研究で、グーツムーツの主著『青少年の体育』初版（1793 年）から第二版（増補改訂版、1804 年）の改稿において、政治的姿勢の変化が見出されないことを指摘した。既に多くの知識人たちがフランス革命の暴力化に失望し、ドイツへの波及を危惧していたのに対し、グーツムーツはこの著作において、同時代の政治情勢に対する直接的反応を示さなかった。それどころか彼は、初版の随所にあった特殊ドイツ的な要素を入念に排除し、体育の普遍性を古今の自

然科学的知見によって強調することで、『青少年の体育』を諸外国でも抵抗なく受け入れられる汎用的な教科書へと洗練させた――実際この本は、短い期間にヨーロッパ諸語に翻訳され、各地の「国民体操」創立に寄与した。

したがって、彼の体育にナショナリスティックな色彩が混入するのはおそらく、ナポレオン率いるフランスが神聖ローマ帝国を解体し、ドイツを占領するようになった段階以降だと推測される。この想定に基づいて、まず『青少年の体育』初版と第二版の〈軍事教練〉を扱った章を改めて比較検討した。どちらの版でも、隊列行動や陣取り合戦といった軍隊風の身体活動が紹介されているのだが、第二版は職業軍人に委託して書いてもらったテクストであり、遊びの要素が払拭されている。興味深いことにグーツムーツは、軍人によるこの厳格な指南に続けて、今度は自分の筆で遊戯性の強い軍隊風身体活動を書き加えている。もっとも政治性が強く顕現するであろう〈軍事教練〉において、彼は子どもにとっての楽しみを優先したのである。さらに、『青少年の体育』と合わせて 3 部作を成す『身体と精神の鍛練および保養のための遊戯』（1796 年）、『若者と成人のため手仕事』（1801 年）においても、教育目的を踏み越えるような政治性がないことが確認された。

それだけに「祖国ドイツの友として、両親、教育者、教師は子供の教育において今、何をすべきか」と題して解放戦争直後に書いた論文（1814 年）、および『祖国の男児のための体操書』（1817 年）において、もっぱら祖国防衛の兵士育成を目的とする「体操術」が提唱されたことは注目に値する。彼の意識においては、全人教育たる「体育」と、戦時対応の「体操術」とは全く別物であった。しかし指南する身体活動自体が異なるわけではない。すなわちグーツムーツは「体育」を機能転換して「体操術」としたと見るべきではないか。従来の研究では、グーツムーツの教育学的「体育」を、ヤーンが愛国主義的「体操」へと変化させたと解することが多いが、グーツムーツの中に芽生えたナショナリズム志向の影響を無視することはできない。フーコーの主張する生政治理論を当てはめるならば、グーツムーツの体育教育は個人の身体に〈規律・訓練〉を施す最も効果的な制度である。それゆえ、彼によって体系化された近代体育が、個人をもれなく包括するナショナリズムと親和性を持つのは必然的である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田口武史	４．巻 Vol. 22. No.1
２．論文標題 グーツムーツの体育教育と近代	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福岡大学研究部論集　A：人文科学編	６．最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田口武史	４．巻 51
２．論文標題 汎愛主義者グーツムーツの〈軍事教練〉 ー「生政治」としての近代体育ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九州歴史科学	６．最初と最後の頁 102-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田口武史
２．発表標題 〈青少年〉のための体育から〈祖国〉のための体育へ
３．学会等名 日本独文学会中国四国支部第70回研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 田口武史
２．発表標題 運動・遊び・労働：十九世紀ドイツにおける国民教育論
３．学会等名 九州歴史科学研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

1．著者名 日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 714
3．書名 啓蒙思想の百科事典（「国民・民族主義・祖国愛」456－457ページを担当）	

1．著者名 田口武史	4．発行年 2022年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 382
3．書名 植朗子、清川祥恵、南郷晃子編『人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか』（「近代市民の身体をめぐる神話 ―J.C.F.グーツムーツの「体育」におけるゲルマンとギリシア」を担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関